

鎌仲ひとみ監督『六ヶ所村ラブソディ』を語る

2007年1月20日 なごや『六ヶ所村ラブソディ』を観る会 上映会での講演

文責 兼松秀代

みなさん こんにちは 鎌仲です。
ようこそ、きょうは来てくださいました。

『六ヶ所村ラブソディ』という映画を作って318日くらい経ちました。去年3月公開後3日に1回は上映されている勘定になります。

この映画を作り始めた頃は誰が六ヶ所村のことに興味を持ってもらえるのか、誰が映画を観てくれるのだろうか、全く興味を持ってもらえない映画を作っているのではないのかと感じていました。今のように多くの人に見てもらっているのは、信じられないような思いです。

<映画、テレビ、そして映画へ>

この前の作品はドキュメンタリー映画『ヒバクシャー世界の終わりに』という映画です。私が大学を出てはじめて監督して4年間かけて作った映画は、3人しか見に来なくて、そのうち2人が寝ているという映画でした。4年間全財産を注ぎ込んで作った映画がこれでした。お金をかけて何年もかけて作っても観てもらえないのかとうジレンマがありました。

私はフリーの映像作家で作りたい企画をNHKに出して、通ると外のプロダクションで作品をつくり、NHKがそれを放送するというシステムでした。その中で作りたいものをつくっていました。テレビで作り始めてからは自動的にお金が入ってくる、何百万人もの人が見てくれる、これは良いと思いました。

ところが『ヒバクシャー世界の終わりに』という映画を作り、映画の世界に再び戻ってきました。イラクに番組を作りに行ったことがきっかけでテレビで表現することをあきらめることになりました。

それはどういうことかという、1998年にはじめてイラクに行きました。イラクに行ったきっかけは、イラクの子どもたちが白血病やガンで

どんどん死んでいる。その子どもたちに薬を運んでいる女性に出会ったことがきっかけで、女性と一緒にはじめてイラクに行って、治療されないまま死んでいくイラクの子どもたちに出会ってしまったのです。そのうちの一人が「私のことを忘れないでね」というメモを残して、何も薬がない中、死んでいきました。多くの子どもたちがそういう病気でたった今も医療がなく死んでいます。

私が取材していると母親たちにカメラはいらない、薬を持ってきてくれといわれました。

私はお母さんたちに、世界はこの事実を知らない。この事実を知らせれば世界は薬を持ってきてくれる、この事態を知らせなければならぬとお母さんたちに話していました。

私は日本に帰って、イラクで子どもたちが医療がないまま死んでいくことを知らせたいと思うといったら、こう言われました。

当時の大統領サダム・フセインは自分の国に科せられた経済制裁を解除するために子どもたちをつかっている。子どもたちが病気だというのはサダム・フセインのプロパガンダで、私がストレートに表現したらプロパガンダに荷担したことになるというのです。実際に起きていることなのになぜストレートに伝えられないのか、そういう壁にぶち当たりました。

<子どもたちの病気と日本の電気>

この本質は単純に医療がなくて子どもたちが死んでいるのではなく、放射性廃棄物から作られた兵器が戦場で使われて、それによる放射能汚染で子どもたちが被曝をし、病気になり、そして経済制裁で薬がなくて死んでいくという構造だったのです。それに気が付いた時に本質そのものを映画にしようと思いました。これはテレビではできないと分かりました。

全く金のない、予算ゼロのところからこの映画を作りました。これを作らないと「私を忘れないで」といった女の子の遺言を果たしたことになると思いました。

ところが、これを作っていてアレッ！と気づいたことがありました。私が電気をたくさん使っているそのゴミが、放射性廃棄物となり、劣化ウラン弾となり、イラクに撃ち込まれているというリンクがはっきりと見えてきました。イラクで子どもたちが病気で死んでいるということと、私が日本で電気を使っている生活が深く結びついているということを感じることができませんでした。

ではどうしたらいいのか。私はイラクの子どもたちにあなたたちが死んでいくのは仕方がないのよ。だって電気必要だからと言えるか、絶対に言えないと思いました。

しかし電気を使わない生活はできない。今まで知らなかった問題を解明していくにはどうしたらいいのか。私が無自覚に電気を使うことが放射性廃棄物をつくり、放射性廃棄物で兵器が作られ、湾岸戦争からボスニア、コソボ、イラク戦争、アフガニスタンそして世界の米軍基地で演習に使われ、放射能汚染が広がる一方です。そういう現実はどう向き合ったらいいのかということが、私が六ヶ所を撮るきっかけになりました。

<知らされていない再処理工場>

日本では55基の原発があり、世界でも原発が最も密集している地帯です。その55基の原発から出てくる放射能のゴミが全部六ヶ所に行くのです。

これから8月に予定している2兆2000億円をかけた再処理工場がもし本格稼働したら、いろんなことが起きます。そのことを知らされていないと思いました。無自覚の加害者という立場からどうやったら少しでも抜け出していけるのだろうかと考えたときに、家族や友人に原発のことを話しても関心を持ってもらえない。自分

には関係ないと思っている人たちが1億2000万人の大多数だと思いました。その人たちに自分たちが使っている電気が巡り巡ってイラクの子どもたちの命を奪ったり、六ヶ所の再処理工場が本格稼働すれば45兆円が若い世代に負債としてのしかかかっていたり、毎日1日24時間、365日、30年間にわたって年間47,000人分を殺す放射能毒が垂れ流されるということ、どうやったら冷静に伝えられるだろうか。私達はそれを知って選んでいるのだろうかなどという疑問が沸々と湧いてきました。

で、私は何かの考え方を押しつけられるのは嫌だと思いました。私たちは今ものすごく大事な時代に生きているのだと思います。あっちの方向とこっちの方向があって、私たちがこれまでの生き方は人間中心主義という考え方に則った生き方ではないかなと思う。人間が便利に、豊に、快適に過ごせさえすればよい。人間の都合だけを優先した文明を生きているのではないかなと思う。そういう文明が一方では環境を破壊し、自然を奪い、一方では環境を奪っているエンジンが車軸でつながり経済成長になり、私達に経済的物資的繁栄をもたらしているという2つの車輪が回っている文明だったのではないかなと思う。例えて言えば私たちはタコで自分の足を食べて生きているようなものなのだという感じがします。タコとして足を食わずに生きていくためにはどうしたら良いのだろうか。なぜなら私達は環境にしか生かされない存在だと思うのです。一人ひとりが自分の意思として、自分の選択としてこれまで生きてきた、生き方を変えるには、自分で選択するしかないのだと思いました。

これまで私が仕事をしてきたテレビ、マスメディア、雑誌などの世界を振り返ってみると六ヶ所のことはどこにも書いてありませんでした。六ヶ所で何が起ころうとしていて、それが私達にどんな意味があるのか、メディアによって知らされない40年間ではなかったか。

<自分のこことして考えてもらうために>

はじめて六ヶ所に行ったとき、私はガリバーが島に流れついたようなものだと思います。私がガリバーとして生きてきた国は放射線とか放射性物資や核廃棄物は嫌なもの、自分の暮らしの中に抱え込みたくないものだった。ところが六ヶ所に入ると素晴らしいもの、未来のエネルギー、そして自分たちに繁栄をもたらすものだというふういきなり価値が変わってしまう。そしてそれを「そうだ！」と言わないと生きていけない社会がそこにありました。そこには選択肢がなかった。それをいいと言わなければ仕事もなかったし、友だちもできなかった。でも、外の例えば東京に戻ってくると誰に聞いても自分の暮らす地域にそういうものを抱え込みたいかというみんな「え〜っ?」と言う。そこにどういふギャップが存在するのだろうかということになります。

そこで、映画を作るときに反対する人も、それが良いという人も、同じように意見を聞こうと決めました。マスコミは1つの決まった情報しか流さない。こと原発や原子力産業になると反対と推進に分けてその人の意見を反対か推進かだけで区別します。しかし同じ反対だと言っている人でも、いろんな理由があります。推進だ、これでいいんだ、一緒に生きていかなければいけないんだと言っている人も、そこには色々な事情が存在します。一人ひとり違うのです。反対派ではなく何とかさんの意見だというように多様な意見をそのまま映画の中に位置づけていくことではじめて興味を持っていなかった人たちが、こういう意見もあるのか、ああいう意見もあるのか、この人はこう思うのか、じゃあ私はどうだろうか、と考えることができると思うのです。そういう映画をめざして六ヶ所にカメラを持ち込んだのですが、推進する人たちの誰一人として私の取材を受けてはくれませんでした。それは、これまでのマスコミは全て反対の視点からしか作らなかった。だから鎌仲もどうせ反対派の映画を作るのだろう。だから鎌仲に話して

も何の意味もないと思ったのです。

何年も青森県で仕事をしているマスコミの人は「何を今更六ヶ所に聞きに行くんだ。金を受け取って工場が建っている。今更聞きに来られても、あの人たちは何も言うことはないよ」というのが、10年も20年も青森県で仕事をしてきたメディアの人たちの意見でした。

私はそんなはずはないという確信がありました。メディアの人たちは本気で核施設と、放射性廃棄物と再処理工場と一緒に生きていく覚悟をした人たちの本音を、本気で知りたいと聞きに行ったことはないだろうと思った。私は本気で聞きたかったから本気で聞きに行きました。

それでも最初は鎌仲は反対派だと思われてダメでした。12,000人の村人の中でほんの数人しかいない反対派の人たちは一生懸命私のカメラに向かって話してくれた。でも、なけなしの予算を使って六ヶ所に取材に行っても反対派しか撮れない、私の映画が撮れないというジレンマに苦しみました。そこで、私自身の情報公開をしようと思いました。どんな映画監督もやったことがないと思うのですが、映画が完成する前に、3ヶ月間の取材をスケッチ風に編集した六ヶ所通信というビデオレターにして公開しました。それを新聞が報道してくれました。

<ビデオレター公開、推進派が取材に>

はじめて六ヶ所を取材したのは日本で唯一放射性廃棄物だけ受け入れる港でした。その港に日本の原発から使用済み核燃料や放射性廃棄物が運ばれてきます。使用済み燃料が運び込まれるたびに、フェンスの外側で数十人が「そんな物を持ってくるな!」、「核のごみ捨て場にすんな!」とシュプレヒコールをあげています。そのフェンスの内側で危険な核廃棄物を受け入れて運び込む仕事を黙々としている人たちがいました。その人たちこそが六ヶ所村の村人です。フェンスの向こう側とこっち側で大きな断絶が横たわっていました。彼らは決して顔を合わせて話しをすることはしないのです。私はこれから作る

映画を決して断絶を深めるためのものにははいけな思いました。

1本目のビデオレターを買った推進派に取材を申し込むと、謙仲はやっぱり反対派の方を取材して反対派の映画を撮っている。ビデオレター1が証拠だ！と言われました。

私は違います、反対派の意見はしっかり聴いて理解しました。あなたたちが私の取材に応じてくれないから、こういうものを作らなければならない。取材に応じてください。言いたいことがあるのではないですか。私の質問に教えてくださいと、頼んでカメラを持たずに茶飲み話を重ねていくうちに、話をしてくれる人が出てきました。

私のような小さなメディアに顔を出して、名前を出すことは勇気のいることです。自分の言ったことが映像になって不特定多数の人に見てもらうのだから覚悟がいらいます。それでも推進派の人たちは自分の立場からしっかりと自分の意見を言ってくれました。

<最後までインタビューを拒んだ日本原燃>

全部で230時間分のテープを回して、2時間の映画になりました。ビデオレターを3本と番外で岩手編を出してその後、半年間取材を続けました。ビデオレターはスケッチのようなものです。これが映画になるためには、これだけでは足りませんでした。私は最後まで再処理の主体である日本原燃社長のインタビューに応じて欲しいと頼みました。それを2年間続けても、最後まで応じてはくれませんでした。私が記者クラブのメンバーではないというのが理由だったのです。あちこちで情報公開を心がけますといながら、私というメディアを受け入れることは最後までありませんでした。もし、応じてくれたら私はそのまま彼らの意見を映画に入れるつもりでした。映画に出てくる全ての人の意見をそのように扱っています。

<普通の人伝えるために>

作家として反対なら反対としてしっかりしろと、作っている間じゅう言われていました。私は「反対、推進の両方から意見を聞いて、今までにない映画を作ります。そういう映画を観たい人は支援金を送ってください」と頼んで250万円いただきました。ビデオレターのNO.2は推進派のオンパレードになりました。反核の知識のある方たちからみれば、あまりうれしくないと感じることもあり、批判もされました。推進している方たちにすれば、私は反対だし、反対している人からみると謙仲はどちらか分からない。しかし私はそれがいいと思います。私はドキュメンタリーという映像がドキュメンタリーになるには、いかなる、どんなものにも寄りかからない、宣伝にくみしない、いかなるイデオロギーのためにも、政治団体、市民団体、反核団体にもそのものの宣伝に利用されないものを作らなければならないと考えて作っています。だから両方から批判されるのがいいのだなと思いました。両方からダメだと言われてああ良かったと思いました。それができてはじめて普通の人に私が知って欲しいことが伝わる方法だと考えています。教育のためでもなく私という個人が、映像を作る作家として自分のやりたいようにやって自由に作ってはじめて、表現になるのだと思っています。

<答えはみなさんの中に>

でも、一緒に作っているスタッフの中にもいろんな意見がありました。それではダメだ、もっとはっきりと言わないと分かってもらえないと言われました。曖昧だと言われれば、曖昧です。でも、100回以上上映してきて、私が受け止めている反応はすごいです。映画を上映してから毎週何十人も若者が六ヶ所に押し寄せました。そのうちの2人の20代の男の子が六ヶ所に住みつきました。いろいろな動きができています。このハガキは映画の中に出てくる菊川さんという女性が作っているチューリップの花束です。若者たちが菊川さんのところで泊まり、ご飯を食

べさせてもらうので、菊川さんを支援するためにチューリップのハガキセットを作りました。

私は観客の判断を信じて観客の判断に委ねてもらうことを勇気を出してやりました。答えはないのです。でも答えはいっぱいみなさんの中

にあると思っています。六ヶ所は青森県のゆったりした時間の流れの中にある村です。映画もゆっくりと流れていきます。最後までリラックスしてゆっくりとご覧ください。

(小見出しは兼松が付けました。)

◆寄せられた感想から

・本当に生き方を問われる、人としての大切な生き方を考えさせてくれる映画でした。

あまり上手く言えないけど胸に響き、大事な事を思い出させてくれました。(30代 女性)

・六ヶ所村のことは去年知ったばかりで、20年以上前から問題があったことは全く知りませんでした。これから自分に何ができるか考え、行動していきます。まずは、伝えることから始めます。(10代 女性)

・資源の少ない日本では再処理は必要。地球温暖化問題を考えると原子力発電は進めるべき。(40代 男性)

・セラフィールド、マン島の実例が説得力があって、全体の構成が生きていて良かったと思う。(50代 男性)

・チェルノブイリや六ヶ所村は遠いところで自分には関係ないと思っていたけれど自分がついも電気をつかっていると気づいた。あたしにできることは何か分からないけれど、できることは絶対たくさんあると思うので、まずはどうゆうことがあるのか知ろうと思いました。だからがんばって勉強しようと思いました。勉強は好きじゃないけれど。(10代 女性)

・都会で便利な生活を享受しています。そんな自分が一体何ができるのかと考えると、単に「稼働反対」を声高に叫ぶだけでは解決の糸口にならないことを、この映画を観て気づかされました。

イギリスのセラフィールドの例を国民に知らせ、私達はどういう選択をしていくべきか、議論を作り出していくことの必要性を感じます。そのためにも事実をより多くの人に知らせていくことが大切だと痛感しました。マスメディアが何ら伝えないことに憤りむを覚えます。真実の姿を淡々と伝えてくださった鎌仲さんの熱意・感性が素晴らしい！(50代女性)

・知らないことばかりで、自分が無知すぎることをまず自覚しました。自分が学生サークルで過疎化している村の活性に関わっているので、とても重く考えます。もっとたくさんの人に観てもらいたいです。(20代 女性)

・何もしないことは賛成していることと同じと言われた方のお話が、自分にもあてはまる気がしました。“中立”が一番楽なんですね。何もしないで受け身でいることから一歩進むことが今の自分に必要だと気づかされました。

監督はとても明るく、難しそうな問題に立ち向かって強いなと思います。(20代女性)

・苦米地さんの人柄や、田んぼやお米がとても気になりました。もしまだ、今年のお米の予約の枠(そういうのがあれば)があれば、ぜひ食べさせてもらいたいです。

おばあちゃんの歌や田んぼに並ぶ稲や、雪かきするおじいさんや、スツと立ったチューリップとてもきれいでした。(20代 女性)

★六ヶ所に住みついた若者は今年6月23日、24日に「アースデイ六ヶ所」を企画しています。

★再処理工場のことを伝える「6ラプカード」(ポストカード)を広める若い人たちがいます。

★名古屋では上映会のイベントを企画する、絵本を創る、核燃料サイクルの図を自分で作って上映会パンフレットに載せる人等多くの動きがありました。再上映会参加は若者が大半。豊橋でも若者が6月上映。

